「救える命を救いたい」
８名の消防隊員が
使命を胸に被災地へ

西諸広域緊急消防援助隊

西諸広域消防本部　８名

隊長　前原泰典
隊員　田上　博　高尾輝昭
松田健作　眞方智宏
村上辰徳　黒木雄大
吉永拡二

3月14日、宮崎県緊急消防援助隊が被災地へ出発した。西諸広域消防本部からは前原泰典隊長以下８名が参加していた。

宮崎港からフェリーで大阪へ。そこから陸路で移動した。目的地への道中、瓦礫の山と化した光景を目の当たりにし、言葉を失った。

岩手県陸前高田市に着いたのは、17日夕方。一刻も早く捜索を始めたかったが陽も落ちていた。逸る気持ちを抑え、避難所であるキャンプ場施設のトイレとシャワーの建物を借り宿泊した。断水しているのでそれ自体は使えない。外はマイナス5度。建物の中だが、下にある排水溝から夜風が入ってくる。寝袋を着ても凍えるほどの寒さの中で食事を済ませ、仮眠を取った。

18日、防波堤付近で行方不明者の捜索にあたる。防波堤は5メートルはあったが、そこにあったはずの家は防波堤の反対側に流されていた。長距離の移動と睡眠不足、寒さで疲労は極限。しかし、消防車両を見た現地の人から感謝や激励の言葉をかけられるたび「やらなくては」と奮い立たった。

19日、JA大船渡の建物内を捜索。3階建てが津波に飲みこまれていた。身の危険を感じる余震が続く中、捜索にあたった。

その日の午後帰路に着く。結局、生存者を見つけることはできず、もっと活動できればという思いも残った。

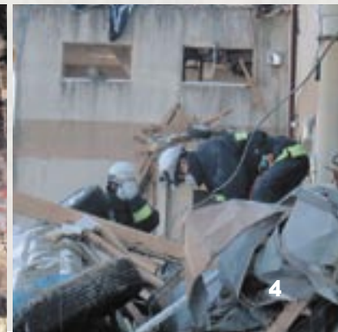
それでも今回の活動で得たものがある。前原隊長は「もしも、次にどこかで大きな震災があっても、何をすべきかの心構えができた。そして、この経験は伝えていきたい」と語った。

その目は、次の使命を見出していた。

▲前原泰典隊長。隊員の家族の想いを背負い、被災地での任務を無事終え、帰還した。

▲ベースキャンプの施設。雪や夜露はしのげるが、凍える寒さであった。

▼西諸広域消防本部から緊急消防援助隊に参加した隊員。



派遣を志願した
市立病院の有志７名が
被災地で医療支援活動

日本医師会 災害医療チーム JMAT

市立病院からのJMAT派遣者

4月23日～28日
松田俊一郎　医師
清水秀一　理学療法士

5月9日～14日
島名昭彦　医師
川原秀樹　理学療法士
武田　愛　看護師
大神洋子　看護師
武田慎一　事務職員

4月22日、市立病院で被災地へ向かう医師や看護師、理学療法士など7名の壮行会が行われた。「少しでも被災者の力になれれば」と派遣を希望したのだ。

今回の派遣は、震災後に日本医師会の要請を受けた宮崎県医師会が、JMATの募集したことによる。県内では20チームが結成され、市立病院のメンバーは4月23日から28日までと、5月9日から14日までの2回に分けて派遣された。

派遣先は宮城県七ヶ浜町。津波で沿岸部は壊滅的打撃を受け、家を失った人が避難所生活を送る。

診察は、朝9時から避難所や仮設住宅を回る。診ることができるのは風邪など初期の疾患と高血圧などの慢性的疾患。施設が十分でないため、検査や専門医の診察が必要な患者は、医療機関に紹介する。時には、同行した事務職員が病院まで搬送することもあった。

被災地での活動には戸惑いもあった。方言の違いで言葉が理解できなかったり、短期間の派遣であったため、患者との信頼関係を深めることが難しかったことによるものだ。慣れない地での活動に精神的疲労を感じたが、避難所の人々の不安などによる精神的ストレスは大変なものだろうと実感した。それでも中には「小林市は新燃岳で大変ですね」など、こちらを思いやる言葉をかけられたこともあったという。

被災地から戻った二人の医師は「現地は復興へ進んでおり、震災直後とは状況が変わっている。それに向けた長期的な支援が必要だと感じた」と語った。

貴重な経験をしたチームは、現在、西諸の地域医療のために頑張っている。

▲診察情報などを知らせる掲示板。

▲JMATの一員として派遣された松田俊一郎先生（写真左）と島名昭彦先生（写真右）。

ジェイマット JMAT

Japan Medical Association Teamの略。日本医師会が東日本大震災の被災地に派遣する災害医療チーム。

緊急消防援助隊

全国的な消防応援を行う消防部隊。被災地の消防力のみでは対応困難な大規模・特殊な災害の発生に際し活動を行う。

▼活動を行った避難所である公民館

宮崎県医師会は、地震発生後、JMATを宮城県に派遣。継続的に支援を続けています。5月25日から30日にかけて、西小林診療所からも宮城県七ヶ浜町にJMAT派遣に参加し、避難所を回診を行った。

▼5月9日から14日まで市立病院から派遣された第2陣のメンバー。